

## 4 闘争とその解毒

例によって難産だった内閣改造も昨日でケリがつき、今日の東京はドンヨリとした梅雨空であるが、昨日までのげいしい政争の跡を忘れてもしたかのようになり、初夏の風が静かに流れている。

政争は本来、政党間の争いであるべきはずであるが、同じ政党の内部における骨肉の争いというものがあり、事実またそのような形における争いが政党間のそれよりも深刻であり、激しくもあることがある。このことは一見理解に苦しむことである。国民の多くは、かかる争いにあるいは無関心であったり、あるいは冷淡であるかであろうが、嫌悪や痛憤を禁じ得ない方々も少なくないと思われる。いやしくも国民の選良たる政治家が、この体たらくではいけない。政治家は一身を国家と国民に捧ぐべきものだ。そしてこういう高い倫理水準を選良たる政治家に期待するのは、いわば当り前のことであるという前提が、この嫌悪や痛憤の裡にあるわけである。そのことについて、私は何も三島由紀夫さんの不道德教育講話を真似るわけでもないが、未熟な政治家の一人として、少しばかり逆説的な臭味のある感懐を洩らさせてもらいたい。

第一はおよそ人間というものは、本来、派閥的動物であるということである。自民党ばかりでなく、社会党においても共産党においても抜き難い派閥があり、総評や日教組等の団体においても、然りである。そればかりか、実業界にも、教育界にも、芸能界にも、学界にも、さらに神や仏に奉仕する聖なる宗門の世界にも、それぞれ特有の派閥というか流派というものがあって、はげしくしのぎをけずっている始末である。僧老同穴を誓う一身同体の夫婦の間においても、冷戦もあれば熱戦もみられる。これが人間の世界にまつわる、どうしても払拭し難い原罪のように思われるほどである。してみれば、政界だけが独りその圏外に立つ、争いのない浄土であり得るはずもなかるうではないか。そついう立論も成立たないことではない。

第二に、権力の争いというものは、相手方の自由ばかりでなく遂にはその生命をも葬ることになつた事例は、歴史が示すところでもあるし、現にこの地球上でも間々行なわれているところである。その観点からみると、いかに激しくても今日の政争というものは、そのようなきびしいものではない。同時にその争いの様相　その是非はともかくとしても　は、いちいち国民の前に刻々報道され、その批判の対象になつておる。いわば今日の政争は、その限りにおいて昔のそれや独裁国のそれとは、程度や様相を異にしておる。

そうはいうものの、われわれとしてもこの忌むべき政争を排除して、政界にできるだけの平和と協力の精神をとりもどしたい念願をもつておる。しかし、それは単なる祈りであり悲願であるだけでは、結実をみることにない感傷に終りかねない。われわれは、この悲願をもつ以上は、そしてその結実を自分のものにしなさいと念願する以上は、この争いの緩和なり鎮静化なりについて、実行可能な処方箋をもたなければならぬ筋合いである。単たる痛罵や義憤をもつて事足りりとしてはいけない。

この課題は、しかしながら、大変むづかしいことである。ただここでは、その一つの手がかりとして、この課題の解決に接近する一、二の提言を試みたいと思つ。

その一つは、その集団内のコミュニケーションをできるだけ拡げてゆき、その風通しをよくすることである。それはその成員間に理解と同情を増すことになるものである。その面で新聞その他マスコミの果たす役割は大きい。何事も包み隠すことなく真相を取材し、それを正確に万人の前に報道する自由をマスコミはもつておる。もちろん報道の自由は一面かかる争いを刺激したりそれを激化したりする作用をもつてはおるが、少なくとも闘争の発酵を阻み、遂にはその緩和と鎮静をもたらす作用をもつものであるといふことである。

その二は、その社会的集団における権威の確立ということである。これは民主主義体制の盾の半面をなすものであるが、この権威から出てくるところの指導力というものが確立されなければ、闘争という病源体の活動を殺すことができないばかりか、その活力を増すことにさえなるといふことである。ただその権威は、一方に偏しない無私のものであり、人間性と道理に徹した賢明なるものでなければならぬことはもちろんである。政党においては総裁その人が、自分の坐っている椅子に内在するところの自覚と責任に徹して、山が崩れてきても動じないだけの強靱な意志をもつて事に当る心術をもたなければならぬ。たいていの闘争は、この指導力によって解消ないしは緩和されるものである。這般の消息は家族、地域団体、結社、その他あらゆる集団にも共通のものではあるまいか。